

縄文方式で火おこし

5年生2人大役担う

■富士見町池袋区

富士見町池袋区のごんと焼きが14日夜、井戸尻史跡公園であった。井戸尻考古館がある同区では約15年前から、縄文の揉みぎりの手法でのごんと焼きの火種を作るように。今年はともに小学5年の平出煌河君(10)―本郷小―と、五味圭汰君(11)―境小―が大役を

担い、おこした火をやぐらに無事点火し、燃え盛る炎を見ながら充実した表情を浮かべた。

火おこしは同館敷地内にある道祖神前で行った。平出君と五味君は小松隆史館長に教わりながら、交互に火きり棒を両手で挟み、火きり臼の穴に合わせて回転させた。協力して出来た火種を鳥の巢の

ようにした麻ひもで包み、それを手にぐるぐると腕を回して火をおこした。

火をたいまつに移し、区民が待つ史跡公園へ。高さ5メートルのやぐらに点火すると、「縄文の火」は瞬間に燃え広がった。2人は「貴重な経験ができた」「ほっとした」と感想を語り、「自分たちで苦労しておこした火だから、ごんと

焼きの炎がすぐきれいに見える」と話した。

同館によると、敷地内の道祖神はもともと区内の別の場所にあり、池袋区で生まれ育ち、同館の初代館長を務めた故・武藤雄六さんが移設。道祖神祭りとして継承したいの思いから、小学高学年の児童によって道祖神前で火をおこすようにしたという。(鮎沢健吾)



揉みぎりの手法で作った火種を麻ひもで包み、ぐるぐると腕を回して火をおこす児童＝14日夜、富士見町池袋